

第8章

ケーススタディ編
(会話で学ぶ地域おこし協力隊)

— この章へ進む前に —

第1章から第7章までは、岩出市地域おこし協力隊の制度・体制・運用ルールを体系的に整理した「公式マニュアル編」として構成しました。

しかし、実際の現場では、マニュアルだけでは判断が難しい“揺れる場面”や“言葉の選び方で結果が変わる相談場面”が数多く存在します。

— この章へ進む前に —

たとえば—

地域の方から「ちょっと手伝って」と言われたとき

無理のある依頼をどう断るか迷うとき

SNSでの反応に不安を感じたとき

地域と行政の間で板挟みになりそうなとき

任期後の不安を一人で抱えてしまいそうなとき

こうした場面は、協力隊・行政職員ともに「教科書では学びにくい領域」です。

そこで本手引書では、これらの“現場のリアル”を理解しやすくするため、

後半に 会話形式のケーススタディ編 を設けました。

【ケーススタディ編の目的】

制度・ルール(前半)を、実際の現場に当てはめて理解できるようにする

協力隊・行政職員双方の視点から「適切な距離感」や「対応の仕方」を学ぶ

迷いやすい場面での“対話のコツ”を身につける

トラブルを未然に防ぎ、相談しやすい関係をつくる

岩出市の協力隊制度で大切にしている価値観を、ストーリーで共有する

【登場人物について】

後半の会話編では、実際の岩出市の組織構成に合わせた登場人物が登場します。

例)

協力隊：高瀬さん

担当職員：中迫係長

担当課長：岩倉課長

実在の個人を特定するものではなく、「協力隊と行政の関係性」をイメージしやすくするための仮名です。

【読み方のポイント】

- ①「前半のどの章と関係するか」を意識して読む
会話編の各ケースは、以下の章と密接に連動しています。
- 第3章：協力隊が安心して活動するために必要なこと
 - 第4章：地域との関わり方
 - 第5章：運用ルール・管理体制
 - 第6章：観光分野の活動指針

会話の後に「このケースが示すポイント」を付けることで、前半のマニュアル内容と自然に紐づきます。

【読み方のポイント】

②「正解を提示する」部分ではなく、

「より良い対話を考える」部分として読む

協力隊の現場では、唯一の正解がない場面が多く存在します。

そのため、会話編は「こういう言い方や考え方が役に立つ」という参考例として活用してください。

【読み方のポイント】

③ 行政職員も「協力隊目線」で読むことを推奨

会話編は、協力隊だけではなく行政側も理解を深めることを目的としています。

「協力隊がどう感じるか」

「行政としてどこまで伴走すべきか」

「地域との橋渡しをどう行うか」

これらの視点を共有することで、制度運用の質が向上します。

【ケーススタディ編が目指す姿】

協力隊・行政職員・地域の三者が、
“相談しながら進める文化”
“不安を抱え込まない仕組み”
“挑戦を応援する関係性”
を育んでいくための土台となること。

岩出市の地域おこし協力隊制度が、
温度のある、持続可能な制度として根づくことを目指して作
成しています。